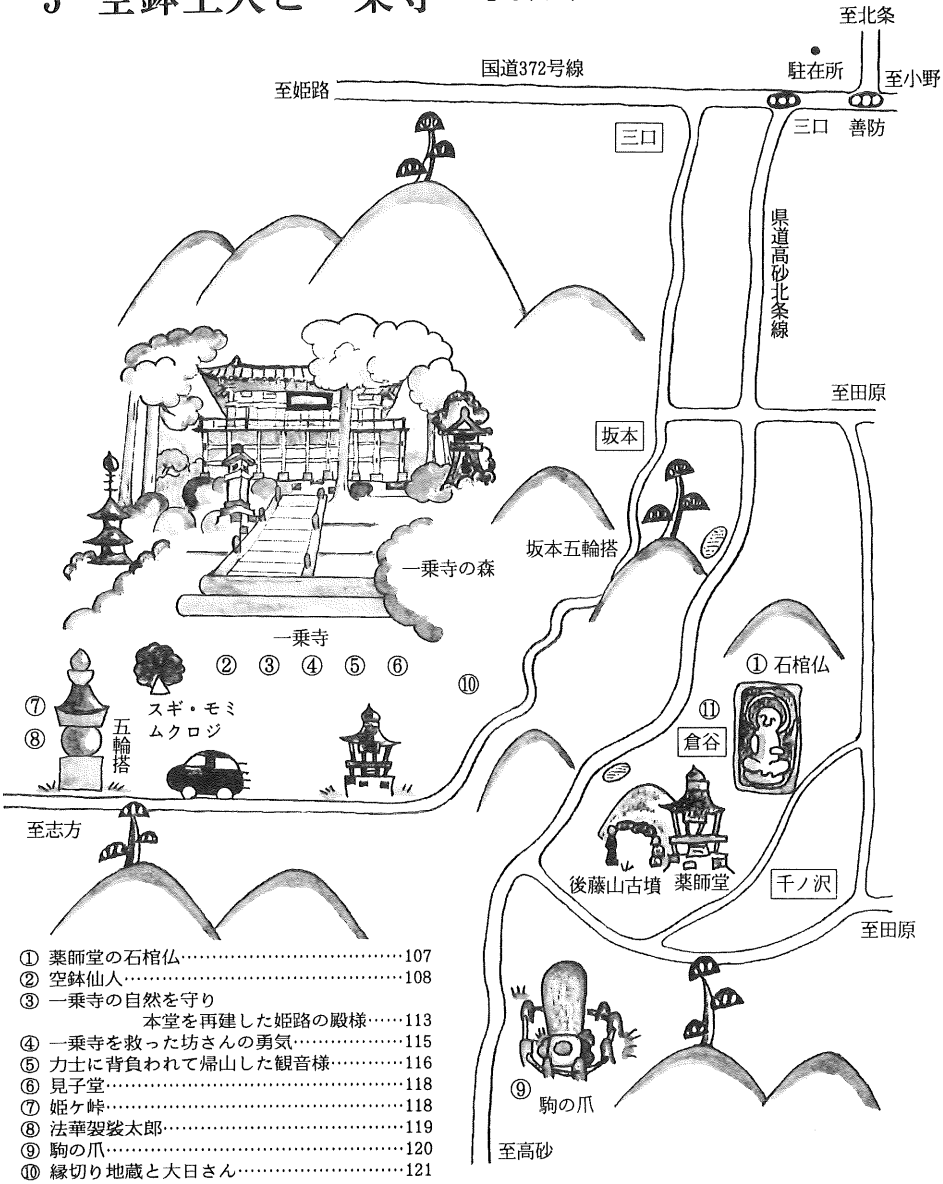
5　空鉢上人と一乗寺　10.0キロメートル



① 薬師堂の石棺仏……107
② 空鉢仙人……108
③ 一乗寺の自然を守り
本堂を再建した姫路の殿様……113
④ 一乗寺を救った坊さんの勇気……115
⑤ 力士に背負われて帰山した観音様……116
⑥ 見子堂……118
⑦ 姫ケ峠……118
⑧ 法華袈裟太郎……119
⑨ 駒の爪……120
⑩ 縁切り地蔵と大日さん……121
⑪ 倉谷町の地名……122

・一乗寺三重塔（国宝）・古瓦（県指定文化財）

承安元年（一一七一）の造立で、上層ほど小さくなっていることや、三重の屋根にむくりのあることなど、古塔のおもかげを残す平安末期の塔で、当代における年代の明らかな唯一の塔です。また、この三重塔の古瓦には承安四年（一一七四）八月四日のへら書銘があって、名のある瓦として、日本でも最古のものです。

・一乗寺絹本著色聖徳太子像・天台高僧図（国宝）、阿弥陀如来像（国重要文化財）

藤原時代の装飾性豊かな画趣をよく表現したもので、美術的価値が高く、中でも高僧図は天台宗関係の最も古い作例です。

・一乗寺銅造聖観音像三体・木造法道仙人像・僧形座像（国重要文化財）

直立する聖観音像は本寺の本尊で、県下最古の仏像として美術史的にも高く評価されています。法道仙人像は弘安九年（一二八六）の銘があり、写実的で枯淡の味があります。

・一乗寺妙見堂・弁天堂・護法堂（国重要文化財）

一乗寺の守護神として建てられたものです。護法堂が鎌倉時代、妙見堂、弁天堂は室町時代の建立と推定されますが、蟇股（かえるまた）に特徴があり、それぞれの建物をひきたたせています。

・一乗寺本堂（国重要文化財）・鐘楼（県指定文化財）

寛永五年（一六二八）、姫路城主本多忠政の再建によるもので、本堂は一名大悲閣の名で知られる信仰の殿堂です。

・一乗寺五輪塔（国重要文化財）、石造宝塔・笠塔婆（県指定文化財）、石造九重塔（市指定）

五輪塔は完存で形よく元享元年（一三二一）の刻名とともに貴重です。笠塔婆は正和五年（一三一六）の造立が知られ姿もよく価値が高いものです。他のものも一乗寺石造遺品として大切な文化財です。

・後藤山古墳・家型石棺蓋石（県指定文化財）

古墳後期の横穴式古墳で玄室が残っており、山すそに運び出された、高度な技術をうかがい知ることのできる特殊な二重屋根式家型石棺蓋石とともに貴重な遺品です。

・倉谷石仏（市指定文化財）

鎌倉中期の作と推定され、わが国石棺仏中でも最古の部類にあたる本格的石仏です。

・坂本石造五輪塔（市指定文化財）

一乗寺のものとよく似ており、時代の古さが知られます。

・坂本碑仏（県指定文化財）

薬師堂の石棺仏（倉谷町）

今、薬師堂のある地は、江戸時代、医王山延命寺という寺院が建っていた跡なのだそうです。

その昔、この村に疫病が流行して、村人たちは大変困っていました。そのとき、しきりに大雨が降り続いてたくさんの土砂が流れ出し、大きな石が土中から突き出して来ました。村人が驚いて近よって見ると、その石には薬師如来像が刻みこまれていたのです。

村人たちはさっそく堂塔を建てて、この仏像に疫病が退散するようにと祈願しました。すると不思議にも疫病は、たちどころにうそのように消えてしまったのです。喜んだ村人たちは、ここを医の王の山と名づけ、石仏をいよいよ尊敬したのだといいます。

今になって考えますと、大雨で封土が洗われたため、古墳の石棺が露出したのを、村人たちがさらに掘り出したところ、たまたま疫病が流行したので、その祟りだとして恐れ、掘り出した石棺の蓋石に仏像を刻んで祀（まつ）ったものでないかと想像できます。

（加西郡誌より）

空鉢仙人（坂本町）

法華山の一乗寺を開いたのは、法道というえらーい坊さんです。

法道はインドの国の人で、霊鷲山（りょうじゅせん）というそれはそれは深ーいふかーい山奥にこもって、仙術を修行した仙人です。だから、空を飛ぶことなど朝めし前だったのです。

この法道仙人が、紫の雲に乗って一気に中国を飛び越え、朝鮮を渡って、はるばる日本にやって来たのです。インドからたずさえて来た観世音菩薩の銅像を、安置するのにふさわしい聖地はないものかと、雲の上から下界をながめていました。

すると、ありましたありました。谷の形が極楽浄土の蓮華座（れんげざ）の形をし、山の峰は、さながら八枚の花びらをもつハスの形に分かれていて、五色の光明を放っているのです。

「ここじゃ、ここじゃ。これこそ、わしが探し求めておった霊地じゃわい。こここそ法華山と呼ぶにふさわしいところじゃ」

よろこんだ法道仙人は、さっそく雲を降りて山に入りました。そして岩穴に入って、持って来た観音像をおまつりし、昼となく、夜となく一日中法華経をお祈りいたしました。

みなさんは、法道仙人が一日中洞窟にこもっていて、食事はどうしていたのだろうと、不思議に思うでしょ

う。仙人はまた不思議な術を心得ていたのです。

それは、鉢を空に飛ばして、その日に食べるだけの米や野菜やみそを恵んでもらうという方法です。

人々は鉢が飛んでくるのを見つけると

「ほーら、法道仙人の鉢が飛んで来たぞ」

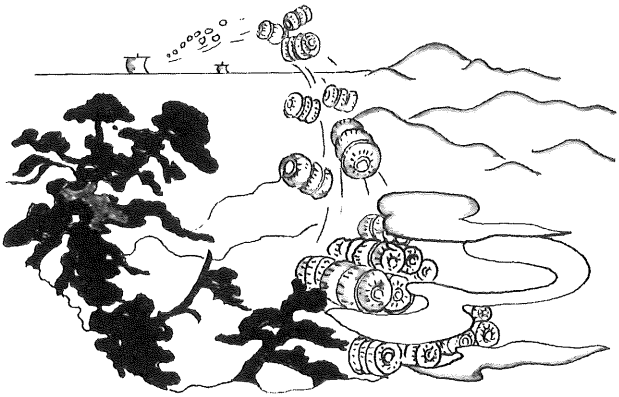
といっては、食べものを入れて返したものです。だから仙人はわざわざ麓の村々をまわって、托鉢(たくはつ)に出かけなくても、山にいて読経を続けておればよかったのです。

里人たちは法道仙人を、「空鉢仙人」と呼ぶようになりました。

その頃、瀬戸内海は、朝廷へ上納する年貢米や、めずらしい産物を積んだ船が、さかんに行き来しておりました。法道仙人は、そこで、海を見おろせる生石(おおしこ)大明神（石の宝殿）のそばの岩上に、この鉢をのせておいて、食べ物をどっさり積んだ船が沖を通りかかると、この鉢を船に飛ばしては、その日の糧を恵んでもらっていたのです。鉢をのせていた所は、空鉢塚として今に残っています。

ある秋の日のことです。その年にとれた新米の俵をいっぱい積んだ舟が、白い帆をふくらませて、沖を通りました。そこで、法道仙人は、いつものようにこの船へ鉢を投げました。

飛んで来る空鉢を見つけた船頭たちは、



「あれがうわさに聞いた法道仙人の鉢や」
「ずんずんこっちへ飛んでくるぞ」
「早よう、米を入れてやれ」
と、口々にわめきたてました。これを聞いた藤井かつら丸という、この船の頭(かしら)は、
「とんでもない。これはお上へ納める大切な年貢米だ。たとえ一粒といっても、やるわけにはいかん」
と、船頭をしかりつけました。
「こんなに何俵も積んでいるんや、ひとにぎりくらい差し上げてもよさそうなもんに」
と、ぶつぶついう者もありましたが、船はそのまま通り過ぎようとしました。

空鉢はむなしく空を飛んでいましたが、あれあれ不思議。船に積んだ米俵が鉢について次々に「フワリ、フワリ」と、空に舞い上がったではありませんか。みんなが、あれよあれよとあっけにとられている間に、すべての米俵が鉢を先頭にして、法華山をめがけて飛びさってしまいました。その時の米の量がなんと千石

もあったといいます。こんなにたくさんの米俵が、まるで雁が飛ぶように空を飛んでいくのですから、どんなにか不思議な光景だったことでしょう。

かつら丸は、まっ青になってしまいました。すぐに船を岸につけて、ころがるように法華山に登りました。登ってみると、自分の船に積んでいた米俵が、みんな山の上に美しく積んであるではありませんか。かつら丸は、頭を地につけんばかりにして

「どうか、この米俵を返してやって下さい」

と頼みました。

法道仙人は笑いながら、

「それではかえしてやろう。返してやるから、すぐ運び下ろしなさい」

といったということです。

かつら丸は船に戻り、米俵を運び下ろす用意をしました。その時です。法華山の方から、米俵が次から次へと飛んで来て、どんどん船の上に降って来たのです。見るまに元通り船いっぱいに積みこまれてしまいました。

みんなは、法華山の方に向って手を合わせながら船を進めたということです。

実は、米俵が法華山から空を飛んで船へ帰って来た時、その中の一俵だけが、どうしたことか加古川の流

れのすぐそばに落ちたのです。このことがあってから、この村は米堕村（今の米田町）と呼ばれるようになり、作った稲はみちがえるように毎年豊作で、お金持ちが多くなったと言われています。

さて、都について藤井かつら丸は、自分が出合った不思議な出来ごとを天皇にお話しいたしました。ちょうど、ご病気になられていた孝徳天皇は、お話しを聞かれるとすぐに、お使いの安倍倉内という者を法華山におつかわしになりました。そして、法道仙人を都におまねきになり、ご病気平癒のお祈りをおさせになりました。

天皇は、この法道仙人のお祈りのおかげで、ご病気がたちまち全快されたのです。仙人を心からおしたいになられた孝徳天皇は、さっそく法華山に金堂をお建てになりました。これが一乗寺のはじまりですが、白雉元年といいますから、今から千三百年以上も昔の話です。

一乗寺はその後、開山堂や三重塔などたくさんの建物が建てられて、立派なお寺としてととのっていきました。金堂は、その後、山名氏の兵火に焼かれて、今の本堂、大悲閣は、姫路城主の本多忠政という殿さんが建てなおしたものです。

（加西郡誌より）

一乗寺の自然を守り本堂を再建した姫路の殿様（坂本町）

法華山一乗寺は、法道仙人が今から千三百年以上も昔の飛鳥時代に開いたと伝えられる由緒のあるお寺です。

法道仙人が時の帝、孝徳天皇のご病気を、お祈りによって全快させたことから、天皇の勅願で白雉元年（六五〇）に、梁間九間、奥行八間という壮大な本堂が建てられたのにはじまります。

永延元年（九八七）には、花山法皇が西国巡礼をされて、この一乗寺におまいりになり、

「春は花　夏は橘　秋は菊　いつも妙なる法の華山」

とお詠みになって、西国二十六番札所に定められました。

本堂は、本尊聖観世音菩薩をおまつりする場所で、以来人々の信仰あつく、今に至るまで巡礼の姿の絶えることがありません。

室町時代には一乗寺が嘉吉の乱（一四四一）による山名氏の兵火で、講堂や常行堂を焼失するという不幸がありましたが、本堂は焼け残り、千年近くもの間、創立当時のままの姿で人々の信仰の殿堂でした。しか

し、江戸時代の初め、元和三年（一六一七）の正月七日、恒例の鬼追式の夜失火して鐘楼とともに焼けてしまったのです。人々の驚きと嘆きははかり知ることができないほど大きく、焼け跡にくずおれてただむなしく礎石をながめながら涙するばかりであったといいます。戦乱に明け暮れた当時ですから、巨大な本堂を再建する力は、お寺にも信者たちにもありません。人々の嘆きは容易に想像できます。

たまたまその年の秋、伊勢の桑名から移されて姫路の城主となった本多美濃守忠政が、程なく一乗寺に参詣されました。寺の荒れ果てた様子をまのあたりに見られた忠政公は、何とか再建したいと決意を固められ、家臣古沢五郎左衛門尉に命じて計画を進められたのです。

九間に八間という大きな建物を作るのです。膨大な用材と数多くの腕のすぐれた大工、それにたくさんの人夫がいります。建築のための木材は、法華山に生えている木は使わず、遠く九州や四国から選ばれ運ばれて来たのです。

法華山の自然を守り、霊地にふさわしい環境を残した中に、昔どうりの大本堂を再建したいという強い願いと、深い自然を愛する心があったからにちがいありません。現在の一乗寺が千古の木々に囲まれて、霊場そのもののたたずまいを今に伝えているのも、忠政のこの心あってのものと教えられるところが多いのです。

寛永四年（一六二七）の十二月から、翌五年の正月にかけて、瀬戸内海を運ばれて来た材木が次々と高砂浦（たかさごのうら）に陸上げされました。六月十八日には柱立てが終わり、七月十一日には棟上げ、九月二十六日には

早くも本尊聖観音をおまつりすることができたといいますから、全く驚くばかりの早さです。一日平均千人以上の人々が建築のために働き、延人数にすると何と十一万五千人といいますから、大変な人数ですが、その建築技術のすばらしさはもちろん、人々の再建への願いの強さや情熱をもうかがい知ることができます。

こうして立派に再建された本堂が今に見る「大悲閣」なのです。その柱には、イカダに組んだ跡がはっきりと刻みこまれています。

なお、「大悲閣」の額面の文字は、天台座主となられた承真親王（光格天皇のご養子）の筆蹟だということです。

（加西郡誌より）

一乗寺を救った坊さんの勇気（坂本町）

天正六年（一五七八）、羽柴秀吉を総大将とする三万以上もの軍勢が、三木城攻めのためにここ播磨の地にあふれていました。笹倉城・山下城・田原城など加西武士はことごとく三木方についていましたので、三木城に味方する支（ささ）えの城を次々に落としていき、三木城を兵糧攻（ひょうろうぜ）めにしようという作戦に出た秀吉は、加西

へもたくさんの兵を送りこんで来たのです。

寺や神社などは、戦(いくさ)になると敵兵がひそむ場所になるというので、秀吉軍は次々に火をかけて焼きはらうという戦法をとっていました。酒見寺や周辺寺はこのために焼かれたお寺です。法華山一乗寺へも秀吉は兵を送り焼きうちしようとしました。ところが、一乗寺には大層勇敢なお坊さんがいて、寺を焼かれないためには直接大将秀吉に直訴するより他に方法がないと考えたこの僧は、馬に乗った秀吉の姿を見つけて、その馬の尻尾(しっぽ)をつかみ、ヒラリと秀吉の後に飛び乗ったといいます。そして秀吉をつかまえて、「おそれながら……」と、一乗寺の由緒正しいことや代々天皇のご帰依(きえ)を受けて来たことを話し、焼かないでほしいと頼んだのです。秀吉はこの坊さんの勇気に大そう感心して一乗寺を守ったため、今にたくさんの文化財が残されたのだということです。

（大田実承氏の話より）

力士に背負われて帰山した観音様（坂本町）

明治二十五年の濃尾大地震によってなくなった多くの人たちを供養するために、大垣市で西国三十三ヶ所の開帳が行われ、二十六番法華山からは十一面観音像が出陣しました。

この時、法華山の十一面観音像は他の多くの仏像の中でもひときわすばらしい仏像として人気を博したのです。ところがすぐれた仏像であることが大勢に知れわたったためでしょうか、その後少しして盗難にあってしまったのです。お坊さんたちはもちろん、みんなが大さわぎして付近を探しますと、さいわいなことに坂本町、立石の山林中に隠されているのが見つかったのです。泥棒はきっと、仏像の重さだけでなく罪の重さにもたえかねたのにちがいありません。

見つかった十一面観音は、三口の荒川という相撲取りに背負われて帰って来たのです。荒川は身の丈六尺（百八十センチ）の大男で、浅黒い裸の背中にしっかりと仏像を背負って、坂本の山道を帰って来るのを、人々は何か神神（こうごう）しいものを見る思いでいつまでも見守っていたといいます。

（播磨郷土研究第九号吉家実三氏の文より）

見子堂（坂本町）

法華山一乗寺の境内に見子稲荷というお社がある。石童丸の母が敵の追手をのがれて法華山に身をかくしていた時、このお社の白妙大明神が現われて守護したという。このため無事太山寺に逃れ出ることが出来、そこで石童丸を産んだのだと伝えられている。このため今は、見子大明神として安産の神とあがめられている。

姫ヶ峠（坂本町）

法華山を小原へ越す峠を、姫ヶ峠という。

昔、志方に姫路の殿様につかえていた家老が住んでいた。故あって城務めをやめたために生活が苦しくなり、妻や娘にもないしょで、この峠に出ては追いはぎをしていたのです。良い着物を着ていたり、お金をたくさん持っていそうな人が通りかかると、待ちぶせていて刀で切りつけ、身ぐるみをはいでいたのです。

ある日、娘は母親のすすめで、加東へ奉公に出るため、荷物をもってこの峠に通りかかった。何も知らな

い男は、自分の娘とも知らず、いつものようによい獲物が来たとばかり切りつけたのです。

その夜、男の持ち帰った着物が、きょう、娘の着て出たものであることに気づいた妻が、男にそのわけを問い糺したことから、男は自分が切り殺したのが我が娘であることをはじめて知り、たいそう悔んだ。男は追いはぎをした自分を深く反省し、出家して、自分が切り殺した人たちの霊をとむらったという。

（幸田幸一氏及び大田実承氏の話より）

法華袈裟太郎（坂本町）

昔、法華山にその名も法華袈裟太郎と呼ばれる泥棒が住んでいた。袈裟太郎は夜、あちらこちらの村々に出かけていって、雨戸に耳を寄せてソォーッと中の話し声を聞いたそうだ。今この村には何がたりなくてみんなが困っているのかを聞きこむと、その品物をごっそり買いこんでいる家からぬすんで来ては、困っている村にばらまいた。それでみんなは、法華袈裟太郎を親切な泥棒（？）だと感心したんだそうだ。だから、袈裟太郎は錦絵になってその姿が残されているということだ。

（幸田幸一氏の話より）

駒の爪（加古川市志方町）

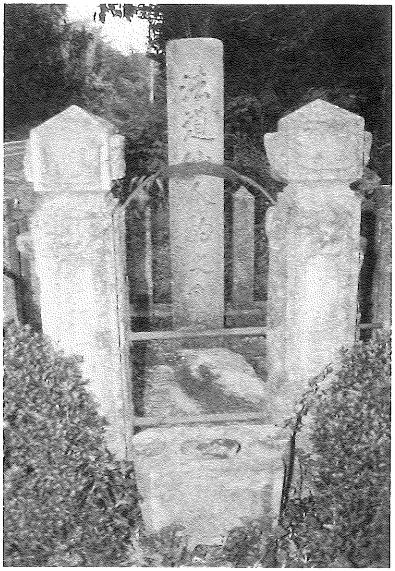
県道高砂北条線、倉谷から志方町に入ったすぐの所の左側に、玉垣に囲まれて、「法道仙人駒爪」と書かれた石塔が立っています。

その根元に自然石があり、岩の表面にはっきりと、馬の蹄の跡がついているのです。

法道仙人が、法華山一乗寺を開かれた当時、仙人が乗られた馬の蹄の跡だということです。馬蹄石は、一乗寺の旧山道を西へ百メートル余り下った所の岩場にもあって、倉谷側にあるのが後足、一乗寺側にあるのが前足の蹄の跡なのだそうです。

なぜなら、法道仙人が馬に乗って法華山に登られるとき、馬は後足で地面をけって、一気に一跳びで、一乗寺の所までついたというのです。

なお、この駒の爪跡のくぼみには、いつもきれいな水がたたえられていて、干天でもこの水のなくなることはないと伝えられています。



縁切り地蔵と大日さん（坂本町）

法華山の総門、山裾にある地蔵さんは、「縁切り地蔵」とよばれる。昔から、花嫁の行列がここを通ると不縁になるという。そのため、どうしても通らねばならないときは、わらじの鼻緒（はなお）を切って供えた。また、親のすすめで気にそまぬ嫁入りをする娘は、こっそりとりっぱなはき物を供えたらしい。すると、かならず不縁になって実家へもどされたと伝える。

縁切り地蔵のすこしかみ手に、大日さんが祀られている。牛が病気になったり、耕作で疲れるとつれて参った。そのときは中に沓（くつ）を編んで供えた。

（北播磨の伝説・吉田省三氏編著より）

倉谷町の地名（倉谷町）

昔、法華山へ飛んで行った法道仙人が、ついうっかりして馬の鞍を落したため、その地を「鞍谷」とよぶようになった。それが、のちに倉谷の字をあて、いまにいたったという。

また、同村には「馬越谷」とよぶ地があり、岩に馬が膝をついたあとだといい伝えている。さらに、志方町との境には、有名な「法道仙人の馬蹄石」がある。

（北播磨の伝説・吉田省三氏編著より）